一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一般に、アイデアが豊かな人というのは、なにごとにも興味を示す、好奇心旺盛な人であることが多い。これは、日頃からインプットに積極的だということだ。ただ、だからといって、本を沢山読んでいれば新しい発想が湧いてくるのか、というとどうもそれほどカンタンではない。おそらく、それくらいのことは、ある程度長く人生を歩んできた人ならご存じだろう。

いずれにしても、いつでも検索できるのだからと頭の中に入れずにいる人は、このような発想をしない。やはり、自分の知識、あるいはその知識から自身が構築した理屈、といったものがあって、初めて生まれてくるものだ。そういう意味では、頭の中に入れてやることは意味がある。テストに出るからとか、知識を人に語れるからとか、そういった理由以上に、1頭の中に入った知識は、重要な人間の能力の一つとなるのである。

また、発想というのは、連想から生まれることが多い。これは、直接的な関連ではなく、なんとなく似ているものなどから引き出される。現在受けた刺激に対して、「なにか似たようなものがあったな」といった具合にリンクが引き出される。人間の頭脳には、これがかなり頻繁にあるのではないか、と僕は感じている。

「これと同じことがどこかであったな」と思いつく、いわゆるデジャヴも同じである。思いついたときには、言葉になっていない。なっていないから、「なんとなく……」と思いつく。思いついたとわかるのに、何を思いついたのか、なかなか引き出せない。それは、視覚的な情景だったり、もっと別の感覚（たとえば嗅覚）であったりする。ただ似ているというだけで、「そうそう、あのときと同じ」で終わってしまうこともある。むしろその方が多い。あるいは、考えても考えても、どうしても思い出せないこと、つまり、思いつきを逃してしまうこともある。夢を思い出せないみたいに、たしかに一度は自分の頭に浮かび上がったのに、煙のように消えてしまうのだ。

しかし、ときには「もしかしたら、あれが使えるのではないか」となったり、「これは、あれとなにか関係があるのでは」となったりして、そこから考えていった結果、新しいアイデアにたどり着けることがある。思いついただけでは、ただのアイデアであり、使いものになるかどうかは、実際に試してみたり、もう少し調べてみたり、あるいは正しいかどうか計算してみたりしないとわからない。それらの確認が、自分ではできないこともある。使えるかどうかも、やはり知識がないと判断できない。でも、2この段階では、他者に協力を求めることも、コンピュータを利用することもできる。

さて、このような3連想のきっかけになる刺激とは、どんなものだろうか。それはさまざまで、そもそも刺激だと感じない些細なものかもしれない。実際、そういったものに敏感か鈍感かで、連想がキドウするか、そのまま見逃すかが決まっているようにも考えられる。

日頃、人間はそんなに多くを経験するわけではない。自分の生活や仕事の範囲であれば、毎日はさほど変化はない。ときどき、旅行をすると刺激的なインプットがあるように感じるのは、それらが日常のものとは違っているから、いわば自分から遠く離れた情報だからである。距離的に遠く離れるという意味ではない。知識的、興味的に遠いということである。

現代は、旅行に行かなくても、TVやネットを通して、世界中の情報にアクセスできるので、日常から離れた刺激は、選り取りみどりである。ところが、たとえば、TVであれば、毎日、毎週、同じ番組を見て、ぼんやりと時間を過ごすようになって、結局はそれが日常になってしまう。日常になれば、刺激は薄くなる。薄くなったと、おそらく自覚できるだろう。「ああ、なんか面白いことがないかな」と欠伸をしたくなる気持ちこそが、誰にでもソナわっている人間の［　　］の発動といえるだろう。

連想のきっかけとなる刺激は、日常から離れたインプットの量と質に依存している。そして、その種のインプットとして最もコウリツが良いのが、おそらく読書だ、と僕は考えているのだ。

読書以外にももちろんある。僕の場合は、自然の観察や、手を使った工作なども、ほとんど同じくらい刺激がある。これは個人差があるだろう。電車に乗って、シャソウの流れる風景を眺めているときも、いろいろ思いつくが、目で見ている数々のもの、街や村、カンバン、人々、構造物、地形なども刺激になるようだ。

しかし、誰にでも共通して効果があるのは、やはり読書だと思う。それは、そこにあるものが、人間の個人の頭から出てきた言葉であり、その集合は、人間のエイチの結晶だからである。本には、日常から距離を取る機能がある。本を開き、活字を読み始めるだけで、一瞬にして遠くまで行ける感覚がある。時間を遡ることもヨウイだし、自分以外の人物の視点でものを見ることもできる。経験したことのない感情も知ることができるし、人の思考の流れをたどることだってできる。

難しい本を読むと、意味がわからないことがある。文章としては読めるし、一つ一つの単語は知っているものなのに、その論理展開についていけない。何を言っているのか、と文章を読み直すことがあるだろう。

4「わからない」ということを体験できるのも、本の特徴である。たとえば、小さい子供は相対性理論の本を読んでもわからないはずである。しかし、落胆することはない。「わからない」ということがわかったのだ。それだけでも読んだ価値がある。自分にはわからないことがこの世界にある、と知ることができた。知っていてもわからないことがある、ということを理解したのである。もしこれがなければ、勉強しようとも思わないだろう。なんとかわかりたい、近づきたいと感じるとすれば、キチョウな動機を得られたといえる。

アインシュタインに普通の子供は会えない。もちろん、彼はもういない。もしいたとしても、わざわざ遠いところへ訪ねてきて、子供と会って話をしたりはしないだろう。それが、本であれば、誰でも彼の書いたものを読めるのである。ここが、5本の最も凄いところだ。なんというのか、奇跡に近いような機会だと思う。

わからないけれど凄そう、という感想を抱くことはないだろうか。わからないのに、凄いことがわかるのである。こういった人間の感覚は実に素晴らしい。これからAIが一般的になり、人類の頭脳に近いものが育ってくると思うけれど、人間が感じる「凄さ」を機械が理解できるまでにどれほど時間がかかるのか、と想像してしまう。

（森博嗣『読書の価値』による）

令和二年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの二枚目

問一　――線部A～Iのカタカナを漢字に改めなさい。

問二　――線部1「頭の中に～一つとなる」とありますが、「頭の中に入った知識」が必要なのはなぜですか。理由を答えなさい。

問三　――線部2「この段階」とはどのような段階ですか。解答らんに合わせて三十五字以内で答えなさい。

問四　――線部3「連想のきっかけになる刺激」とは、どのような性質を持つものだと筆者は考えていますか。問題文中の言葉を使って答えなさい。

問五　□に入れるのに適当な言葉を、問題文中から三字でぬき出して答えなさい。

問六　――線部4『わからない』ということを体験できる」とありますが、それによってどのような効果が期待できると、筆者は考えていますか、答えなさい。

問七　――線部5「本の最も凄いところ」とはどのようなところですか、答えなさい。

二　有名私立中学校を成績不振で退学した「ぼく」は、公立中学校に転校後、クラスの女子で生活保護（経済的に困っている家庭に最低限の生活を保障する制度）を受けている「佐野さん」と交流を持ち、社会の仕組みに関心を抱き始めた。ある日パソコンで調べ物をしていたところ、父から勉強しろとしかられ、反論するとぶたれた上にパソコンを取り上げられる。それに続く次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

しばらくして、母さんだけが部屋にもどってきた。そうっと部屋のドアを閉めると、ぼくに濡れタオルを差し出す。

「ほっぺた赤くなってる。これで冷やしなさい。」

「……ありがとう。」

頬に押しあてると、ひんやりと心地よい。

「ふふっ。」

母さんは、いきなり楽しげに笑った。

「なに？」

「よく、言ってくれたなーと思って。」

「え？」

「お母さんも、同じこと言われてるもん。養われてる立場のくせにとかね……。」

母さんの瞳に一瞬、憎しみの色がよぎった気がした。ギョッとして黙っていると、サッと表情を変える。

「だから和真がさっき言ってくれて、胸がスウッとした！」

少女のような笑顔にもどったので、1ホッとする。ささくれだっていた心が柔らかくなる心地がする。母さんはやはり、ぼくの母さんだと思った。

「受験勉強以外は時間の無駄だって、父さんは本気で思ってるのかな。」

「本気だと思うわよ。自分の学歴にすっごい自信持ってるもの。でも、考え方古すぎよね。」

肩をすくめると、パソコンがなくなったぼくの机の上を見る。

「さっき怒鳴られたよね、なにを調べてたの？」

「……生活保護のことを。」

「へーえ。」

母さんは、感心した、という顔になった。

「そういうことに興味持ってるんだ。和真は昔から、社会の調べ学習、大好きだったものね。」

「受験には、あんまり役立たないけどね。」

「いいじゃない。なにかを知りたいっていう気持ちは、大切だと思うな。興味があることは、どんどん調べたらいいと思う。でも、どうして生活保護に興味を持ったの？」

「友だちが……。」

知らず知らずに、言葉がするっと滑り出た。

そして、佐野さんのことを「友だち」と言ってしまったと思い、友だちなのか？　と考え、なんだか照れくさいような、うれしいような気持ちになってドギマギとした。冷やした頬の代わりに、耳たぶのへんが熱くなる。

「クラスの女子なんだけど……、生活保護を受けているんだ。話を聞くと、制度にいろいろ理不尽なことが多くって。それで調べているんだよ。」

それは、いいことだわ。そう、母さんは言ってくれると思っていた。

なのに母さんは黙りこんだ。

2いかにも不安げなまなざしになり、探るようにこちらを見つめている。

「……クラスメイトの、女子？」

「うん。病気のお母さんに代わって、毎日、妹の保育園の送り迎えまでしてるんだ。」

「和真はその子と……。」

言いにくそうにしていたが、思い切ったように聞いていた。

「おつきあいをしているの？」

3 絶句した。母さんの口から、そのような言葉が出ようとは思いもしなかった。

「まさか！　そんなんじゃないよ！　ありえない。」

「そ、そうよね。あー、びっくりした。生活保護んちの女の子と、おつきあいしているのかと思ったわ。」

その口調、その安堵の顔に、心にビシャッと汚物をぶちまけられたような気持ちになった。

「それ、なに？」

できるだけ冷静な声を出そうとする。けれども、悲しみとも怒りともつかないものがこみあげてきて、胸が苦しくなった。

「なにがびっくりなの？　女の子とおつきあいってとこ？　それとも、その子んちが、生活保護ってとこ？」

「どっちもよ。どっちも驚くわよ！」

母さんは、たった今、お化け屋敷から出てきた人のような声をあげた。

「ガールフレンド作るには時期が悪すぎるし。それにお母さん、生活保護家庭の人って、あんまりいいイメージないもの。そりゃあいろんな人がいるから、ひとくくりにはできないけどね。やっぱりうちとは、ちょっと違う世界の人だと思うじゃない。」

4 あぜんとした。まさか母さんの口から、こんな言葉を聞こうとは。

父さんからは軽んじられ、おばあちゃんからは見くだされてきた母さん。

その母さんなら、弱いものの側に立って、味方になろうとするはずだと思っていたのに。

「……うちとは、ちょっと違う世界の人って、どういう意味？」

ぼくは聞きかえした。

「見くだしているんだ。そういう人たちのこと。」

「そんなことない！」

母さんは、あわてたように言葉をつくろってきた。

「むしろ気の毒だと思うし、なんとかならないかと思ってるわよ。ただ、うちの家はあんまり、そういう人とおつきあいがないからびっくりして……。」

「もういいよ！」

叫んで母さんから目をそらす。両親に対して、こんなに失望する日が来ようとは。

呼吸を整え、波立つ気持ちをどうにか抑えつける。

5 「……ぼくも、人のことは言えない。」

そうだ。少し前までのぼくも、母さんと同じだったんじゃないのか？

「生活レベルが低い人」の世界に、嫌悪や恐怖すら抱いていた。

そういう世界とは、一生関わりを持たずに生きていくものだと思っていた。

今の生活が、決して楽しくもうれしくもなく、居場所すらなくしていたくせに。

なんだかんだ言っても、ここがいちばんよいはずだ、そのはずなんだと自分に言いきかせ、わずかながらの優越感をかき集めるようにして。

6 そう、優越感――。プライドというより優越感だ。

他人との比較でのみ得られる、この感情。

十二歳の春、塾の仲間たちがぼくに向けた、羨望のまなざし。

多くの中から、自分が選び抜かれたという甘美な気持ち。

蒼洋中学をクビになっても、あのときの気持ちはまだ胸の奥底にへばりついたままだ。捨てたほうが楽だとわかっているのに、捨てられない。

自分はやはり人より優れている、恵まれていると思っていたい、この厄介な感情。

ぼくも、母さんも。そして父さんも、おばあちゃんも。

7 自分の中のこの気持ちを、どこかでつっかえ棒にして生きているのかもしれない。

ぼくらは幸せなのだろうか。それとも、哀れなのだろうか。

（安田夏菜『むこう岸』による）

問一　――線部1とありますが、「ホッと」したのはなぜですか。理由を答えなさい。

問二　――線部2「いかにも不安げなまなざしになり」とありますが、「母さん」は実際はどんなことを不安に思っていたのですか。二つ答えなさい。

問三　――線部3「絶句した」とありますが、それはなぜですか。理由を説明した文として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　母さんのことが大好きなのに、ほかの人に好意を寄せているとかんちがいされたから。

イ　佐野さんが苦労していることについて、母さんは何とも思っていないようだったから。

ウ　社会の調べ学習で、生活保護の制度について調査を進めていたことを否定されたから。

エ　受験勉強とは全く無関係で無駄なことに、うつつをぬかしているように思われたから。

オ　「ぼく」が佐野さんに対して、特別な好意を持っているのではないかと疑われたから。

問四　――線部4「あぜんとした」とありますが、それはなぜですか。次の説明文の［　A　］・［　B　］に入れるのに適当な言葉を答えなさい。ただし、［　A　］は問題文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。また、［　B　］は問題文中の言葉を使って十五字以内で答えなさい。

［　A　］と思っていた母が、［　B　］ことに気付いたから。

問五　――線部5「……ぼくも、人のことは言えない」のはなぜですか。理由を答えなさい。

問六　――線部6「プライドというより優越感だ」とはどのようなことですか、答えなさい。

問七　――線部7とありますが、「自分の中のこの気持ちを、どこかでつっかえ棒に」するとはどのようなことを言っているのですか、答えなさい。

三　次の詩を読んで、下の問いに答えなさい。

台風　　池井昌樹（いけいまさき）

すぎたようだな
たいふうも
1 ……
2 そのようですね
ひくいこえ
ちちははがかたらっている
あけがたちかく
ふとんのなかで
3 それをだまってきいている
4 おさないぼくはきえてしまったし
ちちはとっくにいってしまったし
しせつのははともながくあわない
つまはとなりでまだねむっていて
このこえをきくもうだれもいない
そうだった
5 すぎてしまった
なにもかも
すぎてしまった
6 ……
そのようですね
なごりのかぜが

問一　――線部「すぎたようだな／たいふうも」を「ちち」が言った言葉だとすると、――線部1「……」はどのような様子を表していると考えられますか、答えなさい。

問二　――線部2「ひくいこえ／ちちははがかたらっている」とありますが、なぜ「ひくいこえ」なのですか。理由を答えなさい。

問三　――線部3「おさないぼくはきえてしまったし」、4「ちちはとっくにいってしまったし」とありますが、それぞれどのようなことですか、答えなさい。

問四　――線部5「なにもかも／すぎてしまった」とありますが、ここで「ぼく」が感じている気持ちとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　幼いころ、両親の会話に入れてもらえなかった悔（くや）しさ。
イ　台風が来たのに大きな災害にはならなかったうれしさ。
ウ　楽しかった妻との生活を、急に失ってしまったつらさ。
エ　父母とともに過ごした時間がもう戻（もど）ってこない寂（さび）しさ。
オ　母親を早くに亡（な）くし、ひとりになってしまった悲しさ。

問五　――線部6「そのようですね／なごりのかぜが」がどのような場面を表しているのか、さまざまな読み方ができますが、あなたはどのように考えますか。自分で想像して答えなさい。

令和二年度　灘中学校入学試験問題　国語　二日目　五枚のうちの五枚目

受験番号

◎解答に字数制限のある場合、句読点などの記号も字数に数えます。

一

問一
A
B
C（わって）
D
E
F
G
H
I

問二

問三
段階。

問四

問五

問六

問七

二

問一

問二
・
・

問三

問四
A
B

問五

問六

問七

三

問一

問二

問三
3
4

問四

問五